図書館だより

2012.1
No. 17

長崎県立大学佐世保校附属図書館

〒858-8580　佐世保市川下町123
TEL 0956-47-2191（代表）　http://sun.ac.jp/lib

本との思い出

伊達木瀧之助
（経済学科・教授）

論文、文字資料を含めて、本はよく読む。読む本は、仕事・学習のために読む本と自分の興味・関心にまかせて読む本の二つのグループに大別される。これまでに、本を読むために使った時間でみると、仕事・学習のために読んだ時間の方が圧倒的に多いと思う。もちろんこの中には、論文・文字資料を読んだ時間も含まれる。この時間と読んだ本の内容は、私の職業生活の根幹に直接つながり、私と家族の生活の糧となったものなので、私にとって、大切なものであることは、論を待たない。読んだ本の主題も主要なものは記憶している。しかし、この目的で読んだ本の中で「思い出」として残るようなものはほとんど思いつかない。私は、ここで、「思い出」という言葉を、自分の人生に深いつながりをもつ事柄だけれども、現在の自分からある程度客観視してみることができる事柄という意味で使っている。私は、後数か月で定年を迎える。それが、この原稿を依頼された理由らしいのだが、定年が来るまでは、仕事の渦中にあり、生活の態様も日々の気持ちの持ちようもこれまでとなんら変わっていない。つまり、仕事・学習のために読む本、読んだ本は、現在の私の生活、生業（なりわい）に直接つながっているので、まだ「思い出」として客観視できる状況になっていないのだと思う。しかし、仕事を離れた後で、これらの本が果たして「思い出」として残るかどうかは分からない。

一方、自分の興味・関心にまかせて読む本、読んだ本の中には、「思い出」として残っているものがかなりある。私が、興味・関心にまかせて読む本は、大半が歴史的なもの（古典を中心とする古い時代のもの）、歴史に関るもの、生物学を中心とする自然科学に関るものである。この傾向は、少なくとも、大学時代からほとんど変わっていない。中学・高校時代も、歴史科目の学習をするのが楽しみで、他の科目の学習をがまんしてやっていたような記憶があるから、こういう傾向を生んだ根源は、小学校以前の生活体験に関わっているのだろうと思う。しかし、どのような生活体験がどのように結び付いて、この傾向につながったのか、自分では分からない。ただ、私の父は、大正時代に生まれて、昭和前期に教育を受けた人には珍しく（と思うが）、当時逆賊と呼ばれていた足利尊氏が好きな人であり、植物特に蘭科植物の好きな人だった。私が記憶する限り、父は、私の教育にはほとんど関与しなかったと思うが、もしかしたら、父の嗜好が、私の好みに影響しているのかもしれない。ともあれ、自分の興味・関心にまかせて読む本、読んだ本は、私の考え方、感性の形成に大きな影響を及ぼしていると思う。本の内容は、ほとんど記憶していないが、読みながら考えたこと、感じたことは、私の、脳の働きの中に沈潜し、私の人格に深く結び付いているように思う。それは、当然、仕事における取組み方、発想の仕方をも規定しているだろうから、興味・関心にまかせて読む本、読んだ本は深いところで私の職業生活にも密接に結び付いていると思う。

ところで、興味・関心にまかせて本を読む動機には、時間の空白を逃れるという要因が

働いているように思う。要するに、退屈を避けるということである。私には、まだ、物理的に何もしなくても時間の空白を満たすことができるのかどうか分からない。職業生活から引退したらそういうことについても考えてみたいと思っている。

本と私

綾　木　歳　一
（地域政策学科・教授）

学科の図書館運営委員をされている先生から、「来年３月で定年退職される先生に『図書館だより』に一文書いてほしい。」と言われ、貴重なスペースを頂くことになりました。根っからの活字人間、本好きの私ですが、いざ書こうとすると、「本」とは私にとって何かについて深く考えてこなかったことに改めて気がつかされ、重い課題を安易に引受けたと猛省しながら書いています。

「貴方の趣味は何ですか。」と聞かれると、「読書です。」と答えるのが私の常です。改めてどの様な本を読んできたかつらつら考えてみると、ジャンルや著者にこだわりなく、「読んで面白ければ良い」が基準で、気に入った本を出来るだけ購入して読んできています。原稿を依頼されて改めて我が家の本棚を眺めて、漫画から推理物、歴史物までジャンルも著者もばらばらで、手当たり次第、乱読としか言いようがない読み方をしてきたことに我ながら呆れています。

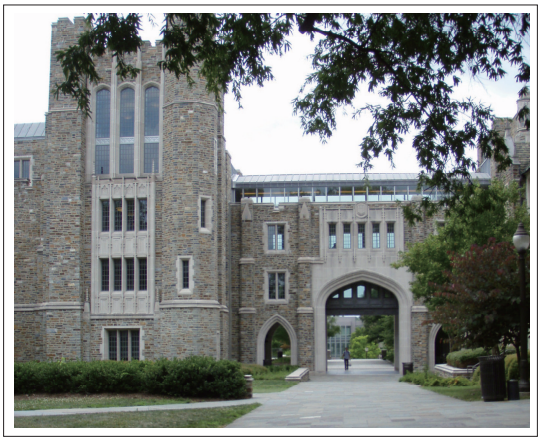
本の選び方は著者が有名かどうかに拘らず、面白そうな題名の本を書店の本棚から取り出し、パラパラと捲ってちょっと読み、面白そうであれば買い込みます。その本を読了して面白ければ、その著者の本を手に入る有る限り読み続け、その間は他の著者には見向きもしない。このような読み方をしていた記憶があり、これは高校時代から現在までほとんど変わっていません。この15年くらいは、藤沢周平と宮城谷昌光に拘って、今まで出版された本はほとんど全て読んでいると自負しています。特に感動した本の該当頁にはその時の感想を書き入れて読むようにしています。このような本は稀ですが、時間を置いて読み直すと同じ本でも別の感想が生まれて自分自身の変化（成長？）に気づかされます。

私の専門は放射線遺伝学・環境変異原学で、特にショウジョウバエを実験材料に放射線や化学物質が突然変異を誘発する仕組みの解明に取組んできました。自然科学の領域では、自分が研究し明らかになったことを論文として発表するときに引用文献として使用するのはジャーナルに発表されている論文（それも、できるだけ新しいもの）であり、専門書は引用するには古くなっていてほとんど利用できないことが多々あります。私にとって専門に関わる本の多くは、その分野で今まで何がどこまで明らかになっているかを学ぶための文献が中心になります。内容を整理してノートに書き出し、理解できないところは関係する別の文献を探して勉強して理解に努めてきました。始めは内容がなかなか理解できず苦しみの連続で嫌になったことを覚えています。その時は、自分にとって本を読むことがstudyで無くworkになっているからだと言い聞かせ、苦しみの中に楽しさが感じられるstudyに進化するように諦めないで読み続けてきた覚えがあります。

ある本（加齢現象のため著者・著書名も忘れました）に、本を読むことは著者と対話をすることであると書かれていました。この対話は自分の好きな時に好きなだけ、しかも自分の学びの深さ次第でいかようにも対話できます。現実には会う機会がない様々な方々と良い対話をしたいものです。

アメリカの大学図書館事情

小　形　健　介
（流通・経営学科・准教授）



Perkins Library

私は、長期研修制度を利用して、アメリカ・ノースカロライナ州ダーラムにあるデューク大学に客員研究員として2010年10月から１年間、滞在した。今回は、デューク大学図書館において私自身が感じたことをもとにアメリカの大学図書館について述べてみたい。私の雑感からアメリカの大学図書館の一端を感じ取って頂ければ幸いである。

デューク大学はアメリカ南部の中心的な大学として広く知られており、6,000人を超える学部生と7,000人の大学院生が森に囲まれた広大なキャンパスで学んでいる。当大学には医学から神学までさまざまな学問分野があり、しかもそれぞれの研究施設がその広大なキャンパスに点在しているため、メインとなるPerkins Libraryのほかに、神学、ビジネス、ロー、メディカルの４つの大学院用図書館などいくつかの図書館がある。私の所属していた政治学部はPerkins Libraryに隣接していたため、しばしば利用した。

Perkins Libraryは、地上４階、地下２階の建物で、向かいに建っているBostock Libraryと渡り廊下で繋がっている。１階にはガラス張りのカフェが併設されており、私もそこで何度かコーヒーを飲みながらスーパーバイザーと議論した。椅子やテーブルが至る所にあり、ドリンクとPCを持ち込んでレポートを作成している人もいれば、数人でグループ学習室を利用し、議論している人々もいた。研修中に訪問したミシシッピ大学も同様であったが、誰でも入館でき、所蔵されている図書については、貴重書を除いて、書庫も含めて閲覧することができる。デューク大学図書館でもっとも驚いたことは、電子ジャーナルの充実である。いくつものデータベースが取り揃えられており、入手できない雑誌はほとんどなく、資料収集の点で困ることはなかった。さらに、自宅に居ながら電子ジャーナルが利用できるため、ある論文が夜遅くに必要となったとしても読むことが可能であり、非常に重宝した。

この研修をつうじて、開放性や利便性という点でアメリカの大学図書館の優れている部分を感じることができた。予算規模や施設といった点で違いはあるものの、本学図書館にも学ぶべき点は少なくないと思われる。

Duke Chapel

平戸オランダ商館の楽しみ方

長　濱　幸　一
（経済学科・講師）

「オランダ東インド会社」（Vereenigde Oostindische　Compagnie、略称VOC、1602年設立）という社名は、世界初の株式会社として、経済学部生の多くが耳にしたことがあるだろう。VOCは、17世紀から18世紀にかけて、アジア各地に商館を置き、アジアとヨーロッパ、そしてアジア内の貿易に従事した。そのため、史上初の多国籍企業という側面も持ち合わせていたという（島田竜登「銅からみた近世アジア間貿易とイギリス産業革命」,水島司編『グローバル・ヒストリーの挑戦』,山川出版，2008年）。また、定型化された商館報告書などの文書は、当時のアジア諸地域の比較を可能にするものとして貴重な歴史資料となっている。

アジア各地に置かれた商館の一つに、平戸オランダ商館があった（1609年設置）。1641年の長崎出島への移転を契機に、同商館は破壊されることになった。そのため、当時の様子を伝えるものは、これまでは、オランダ井戸などの一部残された史跡だけだった。しかし、ついに2011年秋、平戸商館の石造倉庫が復元され、公開の運びとなったのである。

そこで、この復元された平戸商館の見どころを、少し紹介しておこう。まず、外観を見てほしい。白い壁に掲げられたVOCの印章入りのプレートや、荷揚げ・荷下ろしのためのフック付きの窓に気がつくだろう。当時の日本にはなかった多くの物資が運搬されていた様子が想起される。そして、商館内には商船の模型、日本からの輸出品の数々が展示されており、貿易の実態を自分の目で確認できる。さらに、当時の商館長の部屋が再現されており、ヨーロッパから遠く離れた長崎の地で、彼らオランダ人がどのように暮らしていたかを知る手かがりになっている。

そして、多くの展示物の中で一番見てもらいたいのが、「ジャガタラ文」である。鎖国という政策転換によって、外国人と関係のある日本人女子が日本から追放されたというこ

キリストに関係する西暦年号の表示が、取り壊しの理由になったという

とは、あまり知られていないだろう。彼女たちが故郷を思って綴った手紙が、ジャガタラ文である。教科書では学べない、当時の人々の生の声に触れてもらいたい。

さて、皆さんが、平戸を楽しむ際のアドバイスを一つ。それは、本学図書館の二階（階段のすぐ横）の長崎関係図書コーナーを利用することだ。このコーナーには、長崎県内の歴史・産業・文化など多岐にわたる文献が集められており、小旅行の下調べができる。旅行先についての知識の有無は、旅行の面白さを大きく変える。特に平戸観光には、本学の先生方が本年度発行された『平戸・西海学』(山田千香子/吉居秀樹編著, 立石出版, 2011年)が参考になるだろう。平戸オランダ商館については、同書の中で、一章が設けられている（「平戸オランダ商館」（萩原博文））。これを読めば、観光パンフレットでは得られない商館の歴史や、商館の発掘作業の経過を知ることができる。さらに興味が湧いた場合には、『平戸オランダ商館の日記』を手にとって、当時の人々の思いを感じ取ってほしい。「本を通じて考える」「現場に行って考える」、歴史にはさまざまな楽しみ方がある。ようやく受験勉強を離れることができた大学生の皆さんには、ぜひ新しい「歴史の勉強」に挑戦してほしい。

オランダ商館長の気分が味わえる重厚な雰囲気

辞書を作るということ

萩　原　　寛
（地域政策学科・教授）

「一緒にスペイン語辞典を作らないか」と声をかけられたのは、1982年の春。スペイン留学から帰ってきた翌年で、収入源といえば大学の非常勤が２校と、出身校の上智大学のイスパニアセンターの講師、小学館の有志による勉強会の講師、それにたまに入ってくる外務省などからの通訳の仕事ぐらいだったので、提示された日給の高さには思わず口元がゆるんだ。しかも従来の仕事をそのまま続けてよいという絶好の条件だった。

辞書作りの中枢には、スペイン語がプロパーの編集委員長のもとに編集委員、監修協力、その下作業をする若手研究者が縦に並び、そこに出版社の編集長、編集員、校閲係が張り付いた。本文の語義の執筆者、専門用語の監修者、用例をチェックするネイティヴの大学教員、それに付録記事はアウトソーシングだ。編集委員長には、お声をかけてくださった東京外国語大学教授（当時）桑名一博先生がご就任になった。

私の仕事は下作業の若手グループのまとめ役と、重要語の執筆の補佐、類語欄の執筆だった。辞書作りは、言葉の現場や文献からカードを作ることから始めるのが正統派だが、出版社の本音は、1992年に同時開催されたバルセロナ・オリンピックとセビージャ（セビリア）万博に合わせることだから、そんな悠長なこなど言っていられない。当初からフランスのラルース社版の『スペイン語・英語辞典』を土台にする方針だった。

方法はこうだ。大きな重要語を除く見出し語を執筆者に割り振り、語義と用例の英語を日本語訳してもらう。ほかにも語義を入れ込

んでもらえるならば、なお結構。そうやって送られてきた玉石混交の原稿を前に、いよいよ私たち下支えグループの出番となる。日本語訳のチェックに始まり、スペインで刊行されたスペイン語辞典５種のコピーを片手に、ラルース版に欠けている語義を拾い、１語で済む英語対訳をいろいろな日本語に置き換える。必要ならスペイン語で書かれた専門書にも目を通す。情報は原稿に直接書かず、すべて付箋に書きこむ。ゴマ粒のような細かい字と朝から晩まで格闘するのだから、日給が高いのも道理。老眼でないのが心底うれしかった。こうして７年半が過ぎ、予定の時間と予算を大幅にオーバーした小学館『西和中辞典』（第一版）が完成した。

ここまで読んで、パソコンがあるのにと首をかしげるのは、平成生まれの読者諸君だ。最初に編集部に現れたワープロ機械は畳一畳ほどで値段は車一台分。導入を見送ったという話は信じてもらえまい。パソコンが一般化したのは辞書が出た数年後だ。辞書に話を戻せば、新語の意味など外国のサイトで簡単に見つかるし、Webは膨大な言語資料の海だから用法まで一瞬にわかる。モニターが薄いフィルムになれば、電子やWebが辞書の主流となる。これからの辞書作りは、使用者が用例の一部を自由に変えられる機能の開発に重心が移っていくことだろう。カミよ！時代は変わったのです。

書物の価値

中　村　結　花
（地域政策学科･4 年生）

私の卒業論文のテーマは「ヨーロッパにおける活版印刷について」です。ヨーロッパにおける活版印刷は、ドイツ人のグーテンベルクにより発明され、「書物史の第２革命」と称されています。この発明によって、書物の大量生産、学問の進歩、大衆への知識の普及、宗教改革、人文主義の普及、世論形成が可能になりました。私がこのような書物に関するテーマを選択したのは、「本が好き」だという単純な理由からでした。

活版印刷に関する文献を読み進めていくと、書物の価値について考えさせられました。今日、本は私たちにとって非常に身近な存在になっています。誰もが１冊以上の本を所有したり、購入したりすることが簡単にできるようになりました。しかし、こうしたことが一般的になったのは19･20世紀に入ってからです。

ヨーロッパでは、15世紀に印刷機ができるまで基本的に「手書き」で本を作っていました。１冊の本を作るのに数十日、内容によっては数十年かけて作られていたものもあります。非常に時間がかかっていたので、蔵書を増やすことは難しかったようです。12世紀の修道院や大学付属図書館には、200冊の蔵書があれば良いほうでした。長崎県立大学の蔵書数約46万７千冊（平成21年時点）に比べると、はるかに少ない数です。しかも現在のように、気軽に貸出してもらえたわけではありません。数少ない蔵書を盗難から守るため、本には鎖がつけられていました。

このことからも分かるように、当時の書物は非常に高価で、所有できたのは貴族や聖職者など少数の上流階級に限られていました。ある貴族は、自分が所有する本に「この本を盗んだものは縛り首にされる」と呪いの書き言葉を残しています。また戦争時には兵士への戦利品となったり、家畜との交換手段として使われたりもしました。一方私たちと同じ立場の当時の大学生は、ほとんど自分の教科書を所有することができませんでした。そのため教科書の原本を有料で借り、必要な部分を書き写し、何度も読み返して本の内容を暗

記していました。驚くべきことですが、当時は書物の内容を記憶しておくのが良いと考えられていました。

こうした時代を見ると、現在の私たちは非常に恵まれた時代にいると感じます。図書館には豊富な蔵書があり、それらは無料で貸出されています。また自国や海外の文学作品・図鑑・雑誌・エッセイ・名言集などを読み、本を味わい、楽しむことができるようになりました。今日、電子書籍の登場によって「印刷本の時代は終わった」という人もいます。しかし、印刷本が完全に無くなることはないでしょう。印刷本は、約500年前に誕生してから長い時間をかけて普及し、人々に親しまれてきたものです。ページをめくる感触、本棚に整然と並んだ姿、読み終えた後の達成感、収集する楽しみなど電子本では味わえない多くの楽しみがあります。私と同じような考えの人は、きっといると思います。ですから、印刷本が完全に無くなることはないと考えています。

新書のススメ

新　川　　本
（流通・経営学科・准教授）

『バカの壁』、『国家の品格』、『女性の品格』、『さおだけ屋はなぜ潰れないのか？　身近な疑問からはじめる会計学』、『読書力』などは、この10年の間でベストセラーや話題になった書籍である。共通しているのは、すべて新書である。新書とは、岩波新書などの標準的な判型である173mm×105mmおよびそれに近い判型であり、書き下ろしを中心とする書籍である。

今回、学生のみなさんに新書を薦めるのは、コミックスや小説あるいは文庫から、いきなり専門書に触れるのはハードルが高いかもしれないと思うからである。その間を埋める存在として新書を薦めたいと思う。

岩波新書の刊行の目的は「現代人の現代的教養」であり、中公新書はその最大の目標として「真に知るに価する知識だけを選びだして提供すること」としている。また講談社現代新書は「もっぱら万人の魂に生ずる初発的かつ根本的な問題をとらえ、掘り起こし、手引きし、しかも最新の知識への展望を万人に確立させる書物」の提供を目的としている。このように代表的な新書の目的を見ても専門

につながる教養を養うのに適した書籍群であるといえる。

さらに学生のみなさんに薦める理由としては、200ページ前後で完結し、幅広い分野を網羅し、比較的安価（1,000円以下）でほとんどの書店で手に入れることが出来ることもあげられる。専門書を手に入れることは一般書店では品揃えが少なく難しいうえに、出版部数の関係で学生にとっては高額であるのとは対照的であるといえる。もちろん、図書館には多くの専門書、新書が蔵書されているが、学生のみなさん一人ひとりにとって読みたい書籍がそろっているとは限らないことも事実である。

また、新書は書き下ろしを中心としていることから、世の中の動きを反映した出版が行

われ、賛否を含めさまざまな見方の書籍が提供される。同じテーマであっても多面的な見方、解説を手軽に手に入れ、比較して読むことが出来る。多面的な見方をすることが、そのテーマの本質を理解するうえでは大切なことである。そして、新書を通して得た興味をより深めていくために、関連する専門書を読み、背景にある理論や歴史などを理解していくことが学ぶことの意味だと考える。

手軽に情報がインターネットなどで手に入る現在、読書することを苦手だと感じる学生も多くいると思うが、まずは新書を読むことから始めてみてはどうだろうか。では最後に、2011年１～６月の紀伊國屋書店新宿本店の新書ベストテンをあげておくので、興味あるものがあれば、ぜひ手にとって読んでみて欲しい。

『子どもの才能は３歳、７歳、10歳で決まる！ －脳を鍛える10の方法』林成之、幻冬舎
『デフレの正体 経済は「人口の波」で動く』藻谷 浩介 角川書店
『日本はなぜ世界でいちばん人気があるのか』竹田恒泰 PHP研究所
『老いの才覚 』曽野綾子 ベストセラーズ
『日本人の誇り』藤原正彦 文藝春秋
『やめないよ 』三浦知良 新潮社
『日本語教室』井上ひさし 新潮社
『臓器は若返る－メタボリックドミノの真実』伊藤裕 朝日新聞出版
『原発のウソ』小出裕章 扶桑社

附属図書館からのInformation

日野中学校生が附属図書館で職場体験をしました！

附属図書館では毎年、日野中学校が実施している職場体験を受け入れています。

今年は11月９日(水)～11日(金)までの３日間

２学年生の２名を迎えました。

期間中は主にカウンターでの資料の貸出や返却、図書や視聴覚資料の装備や配架などを体験してもらいました。２人は緊張しながらも、積極的に図書館業務に取り組んでくれました。この体験を通じて仕事への関心を深め、図書館をより身近に感じてくれることを大いに期待します。

◆附属図書館HPアドレス　http://sun.ac.jp/lib

- **当館は本学学生以外の方でも県内にお住まいの15歳以上（中学生は除く）の方は利用できます。**
- **開館時間／平　日：午前8時30分～午後10時まで（学生の休業期間中は午前9時～午後5時まで）**
  土曜日：午前9時～午後5時まで
  休館日：日曜日・祝祭日・開学記念日（6/4）

編集・発行責任／長崎県立大学佐世保校附属図書館運営委員会　発行日／2012年1月10日